

海外研修助成事業による研修の成果

研 修 者 氏 名	松金 良祐
所 属 機 関	九州大学病院 薬剤部
<ul style="list-style-type: none"> ・研修に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名 	17th International conference on sarcopenia, cachexia, & wasting disorders
渡 航 期 間	2024年12月5日～2024年12月10日
<ul style="list-style-type: none"> ・研 修 内 容 ・国際学会・会議内容 	上記学会における演題名： Efficacy and safety of anamorelin in pancreatic cancer patients with cachexia: a prospective observational study
<p>研修成果 （ 要約：820字 ）</p> <p>2024年12月に開催された第17回国際悪液質・サルコペニア・筋萎縮症会議(17th SCWD)において、「Efficacy and safety of anamorelin in pancreatic cancer patients with cachexia: a prospective observational study」という演題でポスター発表を行った。発表では、24人の膵がん患者を対象に、アナモレリン治療の効果と安全性を評価した結果を報告した。有効性評価対象患者17人のうち、約59%がレスポonderに分類され、これらの患者では骨格筋量が1ヵ月後に+2.4kg、2ヵ月後に+3.4kgと有意に増加した。また、QOL-ACD 質問票を用いて評価した食欲に関するQOLが改善し、体重増加も認められた。一方で、安全性においては、高血糖が34.8%の患者で認められ、そのうち26.1%がgrade 2以上に該当した。この発生率は過去の臨床試験や添付文書記載のデータを上回るものであり、副作用管理の重要性が示された。</p> <p>発表後には、多くの参加者と有意義なディスカッションを行うことができた。特に、レスポonderとノンレスポonderの違いをさらに明確にするためのバイオマーカーや血中サイトカインの測定、さらには患者背景との関連性について議論が展開された。また、アナモレリン投与に伴う高血糖リスクを低減するための具体的な予防的介入についても意見交換が行われ、今後の研究計画の参考となる視点を獲得することができた。</p> <p>また、本学会では、他の興味深い発表も多数あり、その中でも特に印象に残ったのは、抗GDF-15抗体であるponsegromabに関連する発表である。この第二相試験はponsegromabを12週間投与後、プラセボ群と比較して有意な体重増加を示し、抗GDF15抗体ががん悪液質の新たな治療法として有望かつ、患者の生活の質の向上や予後改善に寄与する可能性があることを示唆した。</p> <p>今回の学会は、悪液質研究に携わる世界中の研究者や臨床医が一堂に会する貴重な場であり、自身の研究成果を発表するだけでなく、他の研究者との交流や情報交換を通じて多くの刺激を受けた。今後は、本学会で得られた知見を基に、アナモレリンの有効性とリスク管理のさらなる解明に努め、悪液質管理に貢献できる研究を進めていきたいと考える。</p>	